榛名神社社報

発行日 平成六年七月一日
発行所 沼田市榛名町二八五一
電話〇二七(四)二六五五
(四)五一二二
発行人 金子浩隆

榛名神社由緒

榛名神社は、沼田・利根発祥の地に鎮座し、三柱一座の神が祭られている。

埴山姫の命（はにやまひめのみこと）
日本武尊の命（やまとたけのみこと）
菅原道真命（すがわらのみちざねのみこと）
三柱

諏訪大神（すわおおかみ）一座

日本武尊は上野国神名帳利根郡の部に従一位宝高明神と記され、諏訪の梨林に鎮座され、菅原道命は従二位雄根明神として根岸（現在の社地）へ祀られている。

そして埴山姫命は享禄三年（一五三〇）に沼田万鬼斉藤幸盛岩城から倉内に移る時、そこに祀られていた宝高明神を城の西下の碓根明神の社へ遷し、菅原の妻の神である榛名大権現を埴山姫命を勧請して三神を一社に祀り神社の名前を「榛名神社」と称した。

諏訪大神は神社の西の諏訪神社を明治四十一年に合祀した。

当社は沼田氏、真田氏、本多氏、黒田氏そして土岐氏と代々城主の尊崇を受け、特に本藩は元和元年真田伊豆守信幸公の奉建であり、木造大鳥居は老中本多伯耆守正永公の奉献である。

明治六年郷社に列し、昭和二年県社に昇格したのであるが、昭和二十一年に社格廃止以来は宗教法人となり利根沼田の総鎮守と称せられている。

社頭講話

宮中歌会始を陪聴して

名誉宮司　金子安平

平成五年十二月十七日、宮内庁式部官長発令清民氏より私あて平成六年一月十四日午前十時三十分、宮中に於て歌始の儀が行われるので当日午前時までに皇居坂下門から御参入なられますようと宮内庁より私に公文書が送られて来た。陪席者として当日午前時までに皇居坂下門から御参入なられますようと宮内庁より私に公文書が送られて来た。

有難いお方かしに感激した。私は当日斎戒沐浴の上、控え間で待ち合わせ、午前十五分頃立ち参内、控え間で待ち合わせ、午前十五分頃立ち参内、控え間で待ち合わせ、午前十五分頃立ち参内、控え間で待ち合わせ、午前十五分頃立ち参内、控え間で待ち合わせ、午前十五分頃立ち参内、

次は東宮・東宮妃・文仁親王・同妃紀子・清子内親王御直宮、正仁親王・同妃華子・寛仁親王妃喜久子・崇仁親王・同妃百合子・寛仁親王妃信子・憲仁親王・同妃久子の方々の十三首披露があって愈々両陛下。

きさらぎの空の歌（三回）
波ぎさらぎの空の平らぎの礎と君らしづもる若狭の島
おおきみの（二五回）
御　製（五回）
波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

見えての間一時間半、全員緊張、伝統絵巻であった。

式典終了、両陛下入御、皇族退出、午後二時五分に下退出。

自宅へ帰宅直ちにこの感激をのこの三首にまとめたけれど野人礼にならわざるる。

伝統の尊き歌会始式典の進める独得の音高く大歌唱ふる聞きくふるふるふる畏しや畏き男なれと召されたり神職故の今日の参内

（六月十日謹記）

結婚は最重の儀礼

この世の中は礼に始まり、礼に終わる。その人生儀礼の中で最重の礼こそ結婚です。

最近の若者は礼に対する考え方が簡単になりつつあります。結婚は人のもの、従って親や先輩の口出しはいらないと言う。成程それにも一理はあろう。しかしそれは人生に対する大切なものを忘れて居りましょう。

自分は古い祖先から伝承の連続である。遠い子孫への出発点である。先祖の社会慣習自分があり、子孫への責任を持っている。だからこそ結婚は二人だけのものではなく、その家の祝儀なのであります。

結婚式の正しい姿

結婚式は地の神々のお祝と両家の御先祖の祝福が大切であります。

そこで榛名神社の「結婚式」は、式典は「縁名神社」として頂きうございます。

最初は「親族一現の儀」と云って風鳴の間にて新郎新婦を中に従僧人が坐り、両家の人々が相対する。典儀云って開始。

続いて巫女の先導により「手水の儀」に移る。古式によって手洗いをすませ、お鳥居をくぐり、雅楽の調べによって殿に参入する。

次が中心の儀である。「三三九度お盃の儀」となる。神職二名・巫女三名・介添一名の五名が一緒に進行する。

・献饌・開祓・献饌・祝詞奏上・誓約・誓詞奉読・玉串奉奠・撤饌・開祓・直ちに行われ、誓約の通例あるのこの儀式は、誓約の儀を終えてから結婚届を言うが、誓約のみを言う事となる。

・直会